

## 済家の風

西村 恵 信

一

曹洞禅を行じておられる方々の前でお話をさせて頂くのは初めてのことで、この機会に皆さんに臨済宗というものについて私なりの体験や考え方を聴いて頂くとともに、また私自身の反省をさせて頂きたいと思えます。

実はもう二十数年も前になりますか、クエーカー教のダグラス・ステイアー長老（アメリカ・ハーバードフォード大  
学教授）の提唱によって、「禅とキリスト教懇談会」という小さな集まりが発足し、それが毎年一回づつ今日まで続いてきているわけですが、私もそこへ禅の側から出席させて頂き、第一回目の時、山田霊林先生や奈良康明先生、ま

た二回目からは鈴木格禅先生ともお出遇いし四、五日寝食を共にしたのが、洞門の方々と親しくなったそもその始まりです。

その後これとは別に、駒沢大学やこの愛知学院大学、そして私のおります花園大学の若手の学者の間で「禅学懇談会」というのが自然にできまして、印仏学会などで集った機会に研究会と懇談を和やかな雰囲気で行っております。

またこの二、三年来、駒大の宗学大会や教学大会にも参加させて頂くようになり、洞門の人々の熱心な研究発表を聴いて大変刺激を受けているところであります。

こういうことは、今から三十年前には恐らく考えられなかったことでもあります。曹洞と臨済の間には何かお互いに

## 濟家の風(西村)

他を見下して悪口を云い合うようなところがあって、曹洞の方からは臨濟を待悟禪だとか、あるいは梯子禪(公案をひとつひとつ数えていく喩え)だとか、あるいは曹洞宗の宗乗は大学院クラスで臨濟宗の方は幼稚園だとかいう人があった。臨濟の方でも負けてならぬと、曹洞宗を騒動宗だと揶揄し、三度粥(参同契)や香香三昧(宝鏡三昧・たくあんばかりの意)の宗旨だとか云う人がありました。坐禅と悟りによって仏祖の慧命を嗣いできた兄弟同士の近親憎悪のような気分があったのでしよう。

しかし他方で、洞門の方の中にわざ／＼臨濟系の専門道場に掛搭して、公案禅を工夫されている人もあり、いま新潟の村上市満福寺の住職をされている川瀬牧牛さんなどは、私の先輩として南禅寺の柴山全慶老師の膝下で骨を折られた方で、私も個人的に随分可愛がって貰いました。原田祖岳老師とも私は不思議な因縁があり、また安谷白雲老師を花園大学に迎えてお話を聴いたこともあります。

臨濟の方でも、今は亡き三島龍沢寺(白隠禪師開創の道場)の中川宋淵老師などは若い日祖岳老師に参じられたことがあったそうで、そのために龍沢寺では今でも雲衲たち

が毎朝通代伝法仏祖の名号の中に、大雲祖岳老師のお名前も大きな声で唱えております。

何はともあれ、今日のような人類の危機の時代に、世界的規模で宗教者の対話と協力が要求されているとき、同じ祖宗門庭の学人同士が相も変らずギクシャクしていることは、アナクロもいところであります。そういう平素からの私の気持からして、今日、本学の竹内道雄先生からお招きを受けて皆さまに話を聞いて頂くことは、本当に有難いことと感謝し、かつその胸の広さに敬服をしているしだいでもあります。従いまして、私の話は「濟家の風」と題しましても、決して臨濟の宣伝でも、ひとりよがりの話でもないので。まあいわば「家醜を挙ぐ」といいますか、いわずもがなのお話をして、皆さんにも臨濟宗のやり方を覗いていただく窓を開けるといいう程度のことではないわけがあります。

平素奈良康明さんなんかから、しきりに「あんたはやっぱり臨濟の人だよ」と云われるのですが、どうやら私には臨濟坊主の臭いがあるようです。そういえばなる程私には奈良康明さんや鈴木格禅さんのようにお行儀がよろしくな

いということが言えます。何でもズケズケと言ってしまうのは私の性格ということもありましようが、やはり多年臨濟さんの中で揉まれて生きてきているうちに自然に身についたものと思います。

学生時代に柴山全慶老師が、「曹洞宗の方は衣の袖も長く、お互いに出会い頭に深々と問訊をされるが、臨濟の方は袖振り／＼闊歩したり、前をまくって立ち小便などしよる。どうも行儀の悪い話ですぞ」といつつ肩を揺振って悪戯っぽく笑われたのがひどく印象的で、私など自分の性に合うのはやっぱり臨濟かなと思つたものです。そういうのが結局身についてしまったのでしょね。

これも学生時代に鈴木大拙博士が久しぶりに帰国され、京都北野の選仏寺で講演をなさつたことがあります。南禅寺僧堂の雲衲たちが三十人程、前の方で行儀よく端坐して博士の入場を待っているところへ博士が到着され、本堂の仏前の演壇に向われたのですが、鈴木博士は本尊の前に立つてごく自然に合掌をされながら、頭も下げずにキョロキョロと仏壇上を眺めまわして、そしてくるりとこちらを向いて話を始められました。その様子が実に洒脱で淡々とし

濟家の風(西村)

ていて、丁度その頃『臨濟録』の「祖仏俱に礼せず」というところを習つたばかりの私は、何となく臨濟の再来を見るようで愉快な気分であつたことを憶い出します。

いわゆる美しい光景というか、私の少年時代に見たまわりの和尚たちの清々しい起ち居振る舞いから得た影響が確かに大きかつたと思うのです。それが後になるとあれが「歩々清風起る」とか、「清風匝地」とか「下載の清風」とかいうことであつたのかと分かつてくるとともに、自分はどうもそういうようにゆかない恥かしさという気分にながつてくるのです。そしてやはり自分もそういうようにありたい、「下載の清風」という身も心も清々しい生き方がしたいと希うようになり、それが今でも続く私の修行であり、自分の人生の理想となつているわけです。決して悟りを開きたいなどとは思わないし、悟りなどという特別なものがあるかどうかと、この点については年を数えるごとに疑惑的になるばかりです。けれども、田舎の凡僧であつても、どこかそこにさっぱりとして気持のよい生き方があるのは禅僧としての確かなユニークさであり、これに自分を近づけたいという希望だけはいまだもって捨て切れずに

居ります。

二

私は臨濟宗の禪者が身につけているそういう一種独特の風格は、やはり専門道場での修行のやり方に原因があると思うのです。叢林生活の規矩という点に於いては、『永平清規』を地で行く曹洞系の道場には叶いませんが、臨濟系の僧堂には、それとは別に雲衲に対して非常に貴重な薰陶を与える要素があると思います。

永平寺での修行の厳しさには、威儀の厳格さ、作法の難しさという要素が強いと思われるのに対して、臨濟系の専門道場には、もっと内面的な、一人一人の雲水の根性を叩きあげるような厳しさがある。威儀とか作法を如法にということも喧しく云われるのですが、逆にまた威儀や作法を超えて、こういう場合にはどうするかというように、常に状況判断を迫るようなところがあるのです。だから規矩通りにやっていたらばという一種の保護みたいなものがなく、一人ひとりが丸裸かにして突き出されるといふ面が強いのです。

その端的な例は、「入室参禅」です。いわゆる「独参」と申しまして、一日数回師家の室に入って与えられた公案に対する自己の見解を呈することが強いられるわけです。

型通りの作法があつて老師の室に入ると、その後は弟子は師と同じ立場に立つことが許されています。老師の身体を突き倒そうが、老師の胸ぐらを掴もうが、馬乗りになろうが自由です。老師の方も相手の出方が予測できないので、竹篋をもって待ち構えている。その間隔は一尺もないというところで見解を呈するのです。見解の出し方によって老師は学人を口汚なく雑言罵倒ししばしば素手でぶんぐるか、竹篋を振ります。臨濟家ではこの室内を「法戦場」というだけに、それは雲衲にとって全く恐ろしい場面があります。

私もあの一見人には温厚と見えた寒松軒柴山全慶老師に、どれ程屈辱を受け、いくたび平手で横っ面をぶん殴られたか知れません。「お前がそのような馬鹿であるとは、今まで知らなんだ。叩いて埃も出ん。情ない話じゃ」といわれてすごすごと禅堂に帰るときは本当にみじめでしたが、今夜は寝ずに坐り抜いて明朝出なおしてこいと云われると、

よし必ず明朝までには片を付けてみせようと、切齒扼腕して徹宵夜坐をしたものです。

「ははあん、お前やっぱりゆうべは寝たな。本気でやる者の顔じゃない。顔にそんな表情が残つとるようじゃ駄目だ。能面みたいにならんととても見性にはおぼつかん」と突き返されてしまうのが積の山でした。確かに真剣に坐り抜いている人がいました。夜中真つ暗の禅堂でかしわ蒲団一枚にくるまって寝ていますが、夜明け近くなるとしんと寒気が身をついてふと眼を覚すと、向う側の単に一晩中坐り込んでいる人の影が見えることができました。「万里の層氷裡に坐す」と白隠が述懐されていますように、囲りの世界が眼には見えていて、しかも身動きもできない心理的状况でしょう。「大死一番」の消息にどうかして辿りつこうとする大憤志の意気ごみでしょう。

寒松軒老師はよく云われました。「例えば弓を引くようなものだ。満月のように引きしぼった弓なら一息フツと吹ただけでも弦は切れる。いい加減な引きようでは大風が吹いても弦は切れまい。見性もそうだ。いい加減な坐り方でどうして悟れるものか」と。結局私は悟りなどというめ

でたきものを体験できず、泣いて道場を下ってしまったわけですが、しかし、一心不乱に悟りたい一念で坐禅をさせてもらった若い頃のあの体験は、私の人生には二度と再び味わうことのできない体験でありましたし、そこから得た尊い「己事究明」の姿勢が今でも私の人生観の基礎になっていることだけは間違いありません。

### 三

ところで、このような非常に荒々しい修行の方法、いや師家の方からいうと、このように殺気を帯びたような学人接待の手段は、実に千二百年以上も遡って、中国臨済宗の宗祖臨済義玄その人のやり方であったわけで、実に驚くべき伝統の堅固さという外はありません。

臨済宗の専門道場で修行する雲衲たちは制間になると、つまり一夏九十日の安居が済んで次の入制安居に入るまでの九十日の間は、道場から暫暇をもらって自坊に帰ったり、あるいは遠方の地へ托鉢行脚に出かけたりするわけですが、旅に出る場合は大本山発行の「托鉢免許状」を携帯していなくてはなりません。というのは安居中ですと托鉢には必

ず「○○僧堂」と書いた看板袋を首に掛けて歩くので、道場に掛錫中の雲衲であることは明白ですが、制間中はこの看板袋を下げることは許されなからず。

夕方になるとどこかのお寺に投宿を願ひ出るわけですが、投宿先へは必ず晚課(四時頃)までに到着しないと閉門されてしまいます。とにかく、庫裡の玄関を入った土間の下段に頭をつけて、「頼みましょーつ」と二回大声を掛けますと、寺の和尚が「どーれ」と云って出てこられる。そこで「自分はどこの県の臨濟宗○○寺の学徒の某でありますが、今夕投宿させていただきたくお願ひいたします」というと、「では『臨濟録』の序文を」と云われるのです。そこでかの『臨濟録』一卷の冒頭にある馬防の序文というのを、頭を床板につけたままで暗誦するのです。この頃では、余りそういう習慣もなくなりまして、浮浪者風の坊さんを追っ払う時ぐらいしか使わないようですし、またこの頃の若い雲衲にはもうそれを諳んじている人は殆んどいないといつていいでしょう。しかし、四十年位い前、つまり第二次大戦の終り頃までは、皆んなこれを言わされたので、雖僧教育の段階で丸覚えしたものです。勿論意味も何も分

からない年頃にこれを覚えるのですから大変ですが、四字一句の秀文で、古来より馬蹄格といわれ、あたかも馬の歩くときの四つの蹄の音のように響く調子のよい文章です。短かいものですから読んでみます。

黃檗山頭に會つて痛棒に遭い、大愚の肋下に方に築拳を解す。饒舌の老婆、尿牀の鬼子。這の風顛漢、再び虎鬚を捋ぶ。巖谷に松を栽う、後人の標榜。鑿頭、地を斲る、幾んど活埋せらる。箇の後生を肯つて暮口に自擱す。辞して机案を焚いて舌頭を坐断す。是れ河南にあらずんば、便ち河北に帰せん。

院、古渡に臨んで、往来を運濟し、要津を把定して壁立万仞。奪人奪境、仙陀を陶鑄し、三要三玄、衲子を釘鈍す。常に家舎に在つて、途中を離れず。無位の真人、面門より出入す。両堂齊しく喝す、賓主歴然。照用同時、本、前後無し。菱花、像に対し、虚谷、声を伝う。妙応無方にして朕迹を留めず。

衣を払つて南邁し、大名に戻止す。興化師承して、東堂に迎え侍す。銅瓶鉄鉢、室を掩い詞を杜づ。松老雲閑、

曠然とし自適す。面壁未だ幾ならざるに、密付將に終え  
なんとす。正法誰にか伝う。瞎驢辺に滅す。

円覚の老演、今為に流通す。点検し將ち來たる、故に  
差舛無し。唯だ一喝を余して、尚、商量せんことを要す。  
具眼の禅流、冀わくは賺つて挙すること無かれ。宣和庚  
子、中秋の日、謹んで序す。

原文は四字一句の漢文ですが、このように読む慣わしに  
なっております。入矢義高先生の岩波文庫本では読みが二  
個処訂正されているのですが、一応私が小僧の頃に諳んじ  
た通りに読みました。

この序文は『臨濟録』の全体を実に簡要に纏めてありま  
す。ひとつひとつ説明しますと結局『臨濟録』全体を説明  
しなくてはなりませんので止めますが、要するに第一段の  
ところでは、若き日の臨濟が黄檗希運に参じ、「仏法的々  
の大意とは何か」と問うて、黄檗に三たび三十棒をくらっ  
た後、大愚の処に行つて大悟し、大いに禅機を養つて黄檗  
の道場に帰り、やがてここを去るまでの話です。臨濟は山  
門の境致のため、更には後人の標榜となすため、よく松を

濟家の風(西村)

栽えたといふので、これを「臨濟栽松の因縁」といって尊  
び、今でも臨濟系の大本山は松一色にしております。

第二段のところは臨濟が故郷に帰り、古渡つまり古い渡  
し場のそばに院を建てて住んで人々を接化済度する、臨濟  
の最も活躍期のエピソードを列ねたものです。渡し場を済  
といひ、それに臨んで建てた院ですから「臨濟院」といひ、  
人々は彼を臨濟和尚と呼んだわけです。

第三段は、臨濟が弟子の興化存奘に法を伝えて河北府に  
隱遁し、やがてまた弟子興化の住する院の東堂(隱寮)に  
迎えられて世を去るまでの曠然自適の生活と、最後の状況  
を記しています。

凡そこのような内容の「序文」を雜僧に丸暗記させると  
ころから、臨濟学徒の教育が始められるのですから、徹底  
的に臨濟に親ませることになります。それで地方の禅寺な  
どへ行くと「賓主歴然」とか「菱花対象」とか「松老雲閑」  
などと書いた扁額などが掛けられていて一層親しみを感  
じることになります。

「臨濟將軍の機有り」といふ評語は皆さんもよくご存知  
と思いますが、臨濟系の禅僧の機鋒、とりわけ墨蹟などに

濟家の風(西村)

見える筆致の天衣無縫なありさまは、やはり臨済の機鋒というものの血を引いているようです。それで、古来より臨済の家風を評したものがいくつもありますので、一応紹介しておきたいと思えます。まず、よく知られている『人天眼目』臨済門庭の一節です。

臨済宗は大機大用、羅籠を脱し窠臼を出ず。虎驟はせ龍奔はしる。星馳せ電激し、天関を転じ地軸を幹ぐらす、衝天の意気を負い、格外の提示を用う。卷舒擒縱、殺活自在なり。

次のものは『五家正宗贊』の中にある臨済伝につけられた贊です。

贊に曰く、広廈の梁、清廟の器。霜を刮けずるの面、冷燄人に逼る。獸を伏するの威腥風地を捲く。……

わが国では徳川時代中期に白隠和尚の高足で東嶺円慈という学僧が『五家参詳要路門』というのを著しております

が、その中では次のように臨済宗の自評をしています。

臨済宗は機鋒を戦わし親疎を論じるを旨と為す。……  
臨済慧照禪師、最初入処痛快、悟後参禅瞥脱、五家各々宗旨を立することありと雖も、初中後の事は、頭正けじめしく尾正おわりしく、如来の正法眼蔵を中興し、祖師西来の密旨を明了にする者は、只だ此の臨済の一宗、最も至当と為すのみ。是の故に古来本録(臨済録)を以て、録中の王と称す。元帝、臨済院の現住に賜うに、臨済正宗の印を以てす。是れ乃ち冠旁(今日でも伝灯の禪者が墨蹟の右肩に臨済正宗の印を押すことを通例としています)の初めなり。所謂る臨済は是れ正宗基源の義なり。……  
公案を体と為し、言句を衣と為し、心地を宗と為し、体用を行となし、利済を旨と為す。師(臨済)の上堂、小参、是れを以て宗と為す。五を含んで一に帰す。貴ぶべき歟。……

凡そ師の上堂、小参等の語、拳揚開示すること、法身を本となす。脱体現成して、老婆禅に似たり。穩密純真、言句を衣と為し、暗号密令、他の知ることを許さず。見

性交えず、他物影を絶す。真実諦当にして、法に依つて則を立つ。体用如々、法界を出でず。受行自在、誰か敢て窺きゆうせん。縁に任せて導利して、間に髪を容れず。根に錯謬なし、摂入を貴しとす。是の如き五家の要路、自ら兼ね。真の宗風と謂つべきなり。

大分、我田引水のところがあります。五家のよいところをすべて取り込んでしまったために、かえって臨済宗の特色が薄くなってしまうようにも見えます。

#### 四

ところで、日本の臨済宗は、今まで見て来ましたような臨済義玄の接化の手段を引き嗣いでいると同時に、また末期の看話禅の伝統を受けていることはご承知の通りです。臨済は、「赤肉団上に一無位の真人有り。常に汝等諸人の面門より出入す。未だ証拠せざるものは看よ看よ」(『臨済録』上堂)と学人に迫り、出家たるものは「真正の見解を得んことを要す」(『同』示衆)と、確実なる宗教体験を要求したのですが、宋代に入って「悟りを以て則と為す」と

濟家の風(西村)

した大慧の看話禅は、古則公案を拈提することによって学人を大疑情につれ込み、大死一番絶後蘇生の見性体験を得せしめるというプラクティカルな方法を用いたわけでした。日本の臨済禅はこの宋朝の看話禅をその最初から輸入しました。大応や大灯の語録を見ると、何の思想的なオリジナリティもなく、ただ古則話頭を提綱しているばかりです。

『大慧書』巻上に、「但だ妄想顛倒底の心、思慮分別底の心、好生悪死底の心、知見解会底の心、欣静厭鬧底の心を將もつて、一時に按下し、只だ按下の処に就いて箇の話頭を看よ。僧趙州に問う、『狗子、還はた仏性有りや』。州云く、『無』。此の一字子、乃ち是れ許多の悪知悪覚を摧く底の器仗なり」とありますように、宋代以来「趙州無字」の公案が特に有用なものとされているようであります。

現在日本の臨済系の専門道場でも、無門関第一則の「趙州無字」の公案から始めるところが殆んどです(中には白隠の「隻手の音声」というのから入らせるところもあるようです)。そして、新到の雲水は、あの趙州無字についている無門慧開の評唱を師家の前で全文誦んじることになっています。

參禪は須らく祖師の関を透るべし、妙悟は心路を窮めて絶せんことを要す。祖関透らず、心路絶せずんば、尽く是れ依草附木の精靈ならん。且らく道え、如何が是れ祖師の関。只だ者の一箇の無の字、乃ち宗門の一関なり。

遂に之を目けて禪宗無門関と曰う。透得過する者は、但だ親しく趙州に見ゆるのみならず、便ち歴代の祖師と手を把って共に行き、眉毛厮あい結んで同一眼に見、同一耳に聞くべし。豈に慶快ならざらんや。透関を要する底有ること莫しや。三百六十の骨節、八万四千の毫竅ごうきやうを將つて、通身に箇の疑団を起して、箇の無の字に参じ、昼夜に提撕ていせいせよ。虚無の会を作すこと莫れ、有無の会を作すこと莫れ。箇の熱鉄丸を吞了するが如くに相あい似て、吐けども又た吐き出さず、従前の悪知悪覚を蕩尽し、久久に純然して自然に内外打成一片す。啞子の夢を得るが如く、只だ自知することを許す。驀然として打発せば、天を驚かし地を動じて、関將軍の大刀を奪い得て手に入るが如く、仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺し、生死岸頭に於て大自在を得、六道四生の中に向つて、

遊戯三昧ならん。且しばらく作麼生そまんか提撕ていせいせん。平生の氣力を尽して箇の無の字を拏とせよ。若し間斷けんたんせずんば、好はなはだ法燭の一点すれば便ち著つくるに似ん。頌に曰く、狗子仏性、全提正令。纔ちやうかに有無に涉れば、衷身失命せん。

このようにまことに齒切れのよいと申しますか、よーし自分も一度そういう境涯を味わってやるぞと、心の踊ってくるような無門和尚の評唱です。私も寒松軒の室に投じて無字の公案に参じた初めの頃は何度か老師の前でこの文章を調子よろしく唱えたものです。やはり、臨濟宗の修行のやり方には、学人をして一度徹底的に疑情一片へと引き込んで行き、そして大死一番をそれぞれの機に応じて体験させ、氷盤を擲碎するがごとき大歡喜、欣喜雀躍の体験を得させようという思いが、師家の方にもあり、また雲水の方でもそれを望んで骨を折るのです。

その過程のなかで、色んな幻想が湧き起ってくるわけで、これは古来「魔境」とか「現境」とかいつて白隠禪では特に喧ましく注意をされているところですが、少くとも、いい気分になる場合であれ、あるいは鐘の音が全身に突きさ

さってくるような苦しい幻覚であれ、凡そ日常生活では味わうことのできぬ体験が臨済の修行にはあるというのは事実です。

もちろん、そのようなものは「現境」であり、修行者にとって最も危険な状況であるわけですが、それすら容易な坐り方では体験できないでしょう。たとえ中途半端なものであれ、臨済の禅僧たちにとって若い時代にそこまでして坐り抜いたことがあるという自負は、やはり禅僧としての自覚、俺はあそこまではやったが突き破るところまでは行けなかったという、恥かしいことでありながら、しかもある種の自分の底を見たというような自信につながるようなものを持っていることは確かだと私は思います。

ところで、日本臨済禅中興の祖といわれ、五百年間出の英傑と讃えられる白隠慧鶴和尚は、宋朝の看話禅を一層有効な仕方では組織立てたことで有名で、これが「白隠禅の公案体系」といわれるものです。その方法は、古人の古則公案を次のように幾つかの種類に分け、それらを機能的見地に立って有効に配列するのです。白隠の公案体系といわれるのは、法身・機関・言詮・難透・向上の五つです。室

### 済家の風(西村)

内によっては向上の代りを五位十重禁とし、更にその上にも末後の牢関を加えているようです。(秋月龍珉著『公案』参照)

公案をこのように機能別に分類することは、すでに中世の臨済禅者に於いて次のような先蹤を見ることができません。

自ら眼を著け去って、直に仏祖の理致・機関を越ゆべし。いわゆる仏の理致を超え荆棘林を過得し、祖の機関を超え、銀山鉄壁を透過して始めて向上の分あることを知りて、坐を得て衣を披し、人のために粘を解き縛を去らん。(『聖一国師法語』)

この宗に三重の義あり。謂ゆる理致・機関・向上是れなり。初の理致と云うは、諸仏の所説、並に祖師の所示の心性等の理語なり。次に機関と云うは、諸仏祖師の眞の慈悲を垂れて、謂ゆる鼻を捏り目を瞬ろがして乃ち云う、泥牛空に飛び、石馬水に入る等是なり。後の向上と云うは、仏祖の直説、諸法の実相等、謂ゆる天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水、眼は横・鼻は直

等是なり。(『大応国師法語』)

このように公案を「理致」と「機関」と「向上」に分けるのです。理致とは文字通り仏教々理の極地を探究するのであり、「機関」はそういう教理の現実生活面でのほたらぎの妙処に参究することによって自分の悟境の表現力を養うための公案でしょう。そして向上というのは普遍的真理と日常個別的な実践との二つを更に超えることで、一切の禅臭を脱して現実のありのままに真理の現成せる当体を見抜くことのようにあります。

## 五

中世臨濟宗の叢林で行われていた、このような公案禅の学人接得の方法を、より一層機能的に再編成したのが、かの徳川中期に駿州(静岡県)原の松蔭寺を舞台に活躍して日本臨濟禅中興の祖と仰がれるに至った白隠慧鶴であります。白隠は世に「五百年間出の人」といわれる程の稀に見る英傑であります。その禅の特色は公案体系の確立と積極的な民衆教化でありました。公案体系のことはこれから

述べますが、一般民衆に分り易く禅を説いた点においても優れたものがあります。白隠には『槐安国語』とか『荊叢毒藥』といった漢文体の大変格調の高い語録がある一方で、「坐禅和讃」や「お多福女郎粉引歌」などという非常に平易に説かれた仮名法語が多く残されております。

また、白隠といえば誰もが思い出しますのはその雄渾で自由奔放な墨蹟であります。その筆致もさることながら、その点数の多いことにかけても群を抜いており、白隠その人のエネルギーはまことに驚嘆に値いたします。

ただし、この人は純粹に臨濟禅を再興しようと努力した人だけに、他宗派の人に対しても、坐禅して悟れば念仏門も法華門もみな根本を貫くことができると説いて、すべてを禅に帰しております点はどうなものでかと思えます。

同じ禅宗でも少し先輩の盤珪永琢の説いた「不生禅」や、隠元隆琦や雲居希庸の「念仏禅」などに対しては仮借なき批判をしておりますし、曹洞禅に対しては「暗証の徒」などという呼び方をしております。白隠には有名な生前書いた自画像がありますがその自賛は、「千仏場中、千仏の嫌と為り、群魔隊裡、群魔の憎と為る。今時黙照の邪党を挫

き、近代断無の瞎僧を盛みなごろしにす。者般醜惡の破瞎禿、醜上に醜を添う又一層」と物凄い勢いです。仏や魔から嫌悪されながらも、云いたいことは云わなければならぬ、この醜い自分の画を書くほど醜いものはないという、いわゆる自画自賛です。まあそれ位い物事をはっきりしないと自家の再興などということではできないのでしょう。

ところで白隠は、中世臨濟宗の禅林で用いた「理致・機関・向上」の三つの公案のカテゴリーを五つに編成し直して、「法身・機関・言詮・難透・向上」とし、更にその上に「洞上五位・十重禁」と「最後の牢関」というのを加えたのです。もちろんこれら「室内の事」は本来公開されるべきものではなく、師資の有で密付相伝されてきたものでありますが、かの破有法王なる人の『現代相似禅評論』（その内容は白隠の公案禅の内容暴露と痛烈な白隠禅批判であります）や、それから柴山全慶老師の『臨濟の禅風』、あるいは秋月龍珉氏の『公案』などによって大概を知ることができるとあります。

白隠は「大疑現前」ということを徹底的に強調します。そしてそこを打ち破って初めて大悟徹底し大解脱の歡喜を

### 濟家の風（西村）

得ることができるといふわけです。白隠の禅が、宋の大慧の看話禅と大きく異なる点は、やはりその修行の過程を、漸次段階的なものとして説いている点にあるといえましょう。これらのことを示す白隠のことばをいくつか拾っておきましょう。

夫れ学者参究功満ちて仏性頓に現前すれば、一時にその理体を証得して、一成一切成、階級を経ずして仏地に至れども、若し次第を以て修行せざれば、一切智・自在智、究竟大菩提を成就すること能わず。（『四智弁』）

縦い一旦因地下の得力これありて後も、動静の二境を嫌わず、正念工夫の相続肝要たるべし。次に灯籠跳りて露柱に入り、仏殿走りて山門を出で、人橋上より過ぐれば橋は流れて水は流れず、南に面して北斗を見る等の語話、掌上を見るが如く分明に見得すべし。而して後に最後向上の一著あり、之を法窟の爪牙、奪命の神符と云う。謂ゆる疎山寿塔の因縁、南泉遷化の話、塩官犀牛の扇子、翠巖夏末の話、乾峰三種の病、これ等の因縁、逐

一透過し了りて、万里の異郷に妻子の面を見るが如くならざれば、即ち真正参玄の上士と称することを許さず。

(仮名法語)

如何にして真正の得悟は得ることぞとならば、塵務繁多、世事紛然、七顛八倒の上に於て、譬えば勇士の大敵に取り囲まれたらん時に、匹馬単鎗、大勇猛の精神を震って一方を突き破って魁け拔んず時の心持にて、正念工夫絶えずりもなく、精彩を付け手脚の下すべき様も無く、四面空洞として、心身ともに消え失せたる心地は、時々は是れ在るものに侍り。此時恐怖を生ぜず、はげみ進み侍れば、一旦の得力は間も無く豁然たる者に侍り。総じて参学は妄念情量と戦い、昏沈睡魔と戦い、動静違順と戦い、是非憎愛と戦い、一切の塵境と相戦い、工念工夫を推し立てもて行く張合にて、不慮の省覚は此れ有ることにて侍り。……(『遠羅天釜』)

とまあこのような調子で、「勇猛の一機、成仏一念にあり」とただ驀直に突き進むことを重ね重ね説いております。このように荆棘林を進むわけですが、しかも白隠は正し

い修行の道順があるというわけで、それが先に申しました法身・機関・言詮・難透・向上という筋道なのであります。法身は中世禅林で「理致」といつているもので、要するに仏教の根本的教義をわが身の上に於いて体得するための公案です。学得底ではなくて「見得底」を見とどけることが大切であるというわけです。

それを次に「機関」の公案によって、具体的に活用していく力を養うのです。「法身」が原理門であるとする、「機関」は実践門ということになるでしょうか。法身では答えとして一般的なものがあるはずですが、機関になるとやはり個性が前面に用き出てこなくてはならないであります。しょう。いわゆる「別解脱」というものであります。一つの場面に即してオリジナルな、個性的な対応が活潑潑地にできなくてはならないわけです。

次に「言詮」といわれる一連の公案は、悟境をいかにズバリと表現するかという訓練、逆にいえば古人の一言半句の中に光る真理の指示を見抜くための工夫であります。「未透底の士は、句に参ぜんよりは意に参ずべし、已透底の士は、意に参ぜんよりは句に参ずべし」(『遠羅天釜』)

といわれるように、祖師の句に参じることは、祖意（悟りの当体）に参じることよりもずっと難しいとされておりません。

禅は不立文字の宗教であります。にもかゝらず禅ほど文字言句の豊富な仏教の宗派もないでしょう。いわゆる「詮の妙」というものでもって、たった一句で学人を轉身させてしまうほどの力をもたなくてはならないというわけで、よく「黄檗の一転語」（『臨濟録』勘弁）とか「趙州三転語」（『碧巖録』九六則）とかいわれるのがそれです。かの有名な鏡清和尚の「雨滴声」の公案（『碧巖録』四十六則）には、「出身は猶お易かる可きも、脱体に道うは応に難し」という鏡清の語がありますが、やはり禅僧にとっては、言語表現ということも大いに重要かつ困難なことからであります。古来、「趙州和尚は口唇皮上に光を放つ」といわれたり、「雲門宗は言句を拵んで親疎を論ずるを旨とす」といわれたりしますように問答のやりとりにおいて悟境を看破することは禅僧の最も特意とするところであります。公案禅ではそういう訓練もさせるわけですが、更にその先に「難透」つまりなかなか透ることができな

### 済家の風（西村）

い難関が待ちうけている。白隠が「縦い又如上の言句に於て逐一分明に見得徹したりとも足れりとする事勿れ。棄て去つて疎山寿塔の因縁、南泉遷化の話、五祖牛過窓櫺の話、柏樹子話有賊機、これ等の話頭毫釐も疑いなきことを得ば、須く知るべし、見処仏祖と同一規範なることを。参玄の上士と称して何を愧づる処かあらん」（『遠羅天釜』）というところ。柴山老師はこのところを次のように説明されております。

「白隠禅師は、まず学人をして禅の根源たり基盤たる無心無分別の体験（理体の証得）を初入の第一関とし、これに無心即有心・無分別即分別の智用（理事一如の功用）を『古人の活句』に参じて分明に見得せしめ、更に任運騰々たる平常心への還源（理事の功用を奪却）を体得するに、いわゆる『難透難信難解難入』の話頭（疎山寿塔、南泉遷化等を指す）を咬著せしめて『無功用真禅の境』を全からしめ、ここに伝統的『悟境』の完成を期する組織的看話を実践したのであった」（柴山全慶著『臨濟の禅風』）と。

普通ですと、その次に「五位、十重禁」となるのですが、室内によっては第五に「向上」という公案群を置くものが

あるようです(秋月『前掲書』、八十二頁)。

向上というのは、それまでの公案を超越して象外に逍遙する境涯を得るための公案であります。内容的には難透の公案と同じと考えてよいようです。要はそれまでに手に入れたところの悟境を全面的に放下してしまふことであり、「仏向上の一著子」は、仏の上に出ることになりません。つまり悟りの臭いを払拭してしまふ、悟からさえも離れる訓練であります。この境涯は古来より「向上の一路、千聖不伝」といわれるようにあらゆる伝統の埒外にあるものゝようであります。

それから、修行がここまで来た人に「洞上五位」を調べさせるのです。「偏正五位」の論理体系にあてはめて、自分の修行の全体をもう一度整理し直してみるものですが、このやり方は白隠の師の正受老人が始められたのだそうです。私も僧堂の頃、先輩の二、三の方が「笠竹」を手にさしているのを見たことがあります。

そして「十重禁」といいます。三聚浄戒・十重禁戒を真に禅者の立場から見るとどうなるか、どのように日常生活の只中で戒を持していくかの工夫であります。

戒にこだわっては禅者の自由を失う、また無戒で自由奔放であっては仏教徒ではありえない。いかにして戒を持つ、しかも自由でありうるかということです。

今日欧米では禅に対して反倫理的であるという批判が起つてきていることは皆さんご存知のことと思います。あちこちのゼンセンターでスキャンダルが起つて世の批難を受けているわけです。それに対して、禅にも正しい倫理というものがあるのだということを、ハワイのダイヤモンド・ゼンセンターの師家であるロバート・エッケンという方が説かれたのが『クロバーの心』(Mind of Clover)という小さな書物です。

公案禅の体系の中でも最後に見せるこの十重禁の問題を世間の前に提出して、正しい禅の倫理観を説かれようとしていてるわけですが、戒の問題の禅的理解は余程深い禅の立場に立って初めて理解されるべきものだと思われたい。私たちがから見ると、これは一般の人々に誤解を招く危険がないかと心配になります。私は大谷大学の『イースタン・ブディスト』という英文雑誌に本書の書評を書いたときにも、そのように書きまして、西洋人読者に注意を促し

ておいたしだいです。しかしそういう書物が必要なほど、西欧世界では倫理が混乱し、それと禅の流行との間に何らかの関係があるのではないかと見る向きも可成りあるのは事実なのです。

さて、公案体系の最究極として「末後の牢関」というものが立てられておるようで、ここに於いて「臨済の宗旨」が総括されるのだそうですが、ここまで行き着く人は千人万人中の「一個半個」というのですから、私など窺い知ることできません。

白隠の公案体系の説明が長くなって終いましたが、それというのも鎌倉・室町・南北朝にかけて、更には徳川に入ってから将来された隠元一派（臨済宗黄檗派）さえもすべて断絶してしまい、今日の臨済禅は例外なく白隠の公案禅一色であるからです。

臨済禅は、それが将らされた当初は宋朝の士大夫禅をそのまま受け入れ、鎌倉・室町幕府に外護されて鎌倉京都に五山の官寺が林立したわけですが、やがてそれらは文化遺産を残して断滅してしまつたのです。今日、残っている白隠禅は遡れば、大応国師（南浦紹明）・大灯国師（宗峰妙

## 済家の風（西村）

超）・無相大師（関山慧玄）という三人の禅者によって基礎をなし、更に戦国時代から徳川初期にかけて着実に地方に伝播していったところの、いわゆる「応灯関の一流」であります。

この一流は五山の官寺と区別されて、山隣派（山林派）と呼ばれた大徳寺・妙心寺を地盤として発展したものであり、文化的なことは一切退け、枯淡な生活に甘んじ、ただひたすら「己事究明」に専念した禅者たちの一流であり、その家風を称して「林下の風」とも申しております。その精神は今日臨済系の道場で日夜唱えられている「大灯国師遺誠」に端的に示されていますので、最後にこれをご紹介します。

### 大灯国師遺誠

汝等諸人、此の山中に来て道のために頭を聚む。衣食の為にすること莫れ。肩あつて著ずということ無く、口あつて食くらわずということ無し。只だ須らく十二時中、無理会の処に向つて究め来り究め去るべし。光陰箭の如し。謹んで雑用心すること莫れ。看取せよ。看取せよ。

濟家の風（西村）

老僧行脚の後、或は寺門繁興、仏閣経巻、金銀を縷め、多衆鬧熱、或は誦経諷咒、長坐不臥、一食卯齋、六時行道、直饒い恁麼にし去ると雖も、仏祖不伝の妙道を以て、胸間に掛在せずんば忽ち因果を撥無し、真風地に墜つ。併な是れ邪魔の種族なり。老僧世を去ること久しくとも、児孫と称することを許さじ。或は一人あり、野外に綿絶

し、一把茅底、折脚鐮内に野菜根を煮て喫して日を過すとも、專一に已事を究明する底は、老僧と日日相見報恩底の人なり。誰か敢て輕忽せんや、勉旃、勉旃。

（本稿は禅研究で行った講演の筋道に沿って改めて書き下したものである。）